民族藝術学会編『民族藝術 Vol.20』2004nen pp.97-106 元原稿 20150114 配布資料

ベトナム北部の少数民族ザオ・ティエンの衣装文化

Clothing culture of the Dao Tien people in northern Vietnam.

内海涼子

抄録：

ベトナム北部に居住するザオ・ティエンは、東南アジアのヤオ民族のサブグループのなかでは唯一、独自の手法で蝋けつ染めをおこない、また、女性が巻きスカートを着用する。これらは、かれらの祖先がおそらく明代に華南を離れる以前に形成された伝統であろう。ザオ・ティエンの衣装、とくに女性の巻きスカートは、その模様も構成の細部も、個人の身分や集落による違いがなく、一世紀以上にわたり変容していない。このような衣装の画一性や不変性は、多様な民族が交錯する華南から東南アジア北部において、移住を常とする民族集団が存続してゆくために衣装が担う機能に結びついている。

Summary： Among the Yao subgroups living in Southeast Asia, only the Dao［zao］ Tien people in the northern Vietnam has their own batik technique, and the women wear gathered wrap-round skirts. These must have been the traditon which had been formed before their ancestors left southern China possibly in the age of Ming Dynasty. The clothing of the Dao Tien, especially women's skirts, shows little difference of design details irrespective of wearer's status or villages, and that has not been changed more than one century. Such uniformity and changelessness for the clothing should be an important part of the functiion of clothing for this ever-immigrating ethnic group to exit in an area of southern China to northern part of Southeast Asia, where many different ethnic groups are living side by side as a mosaic.

ベトナムには、人口の 86 %を占めるキン Kinh 民族のほかに多様な少数民族が中国やラオス、カンボジアとの国境に近い内陸部を中心に居住している。ベトナム政府はそれらの少数民族を 53 民族に分類している。そのうちザオ（ベトナムでは Dao と表記)とよばれている民族は、中国では瑤族に分類され、日本では一般にヤオの名で知られる民族に包括される民族集団である。(本稿では、ベトナムに居住するヤオについては「ザオ」、それ以外については「ヤオ」と記す。)

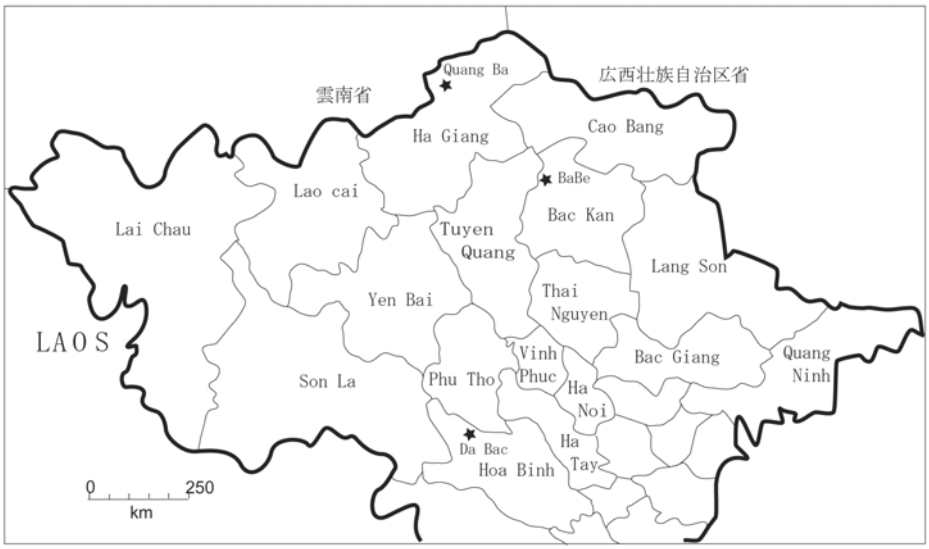
現在、広西、広東、貴州、雲南など中国南部からベトナム・ラオス・タイ・ミャンマーの北部にいたる広範な地域にヤオの多様なサブ・グループが居住している。ヤオの祖先は紀元以前に中国南部の湖南省北部あたりに居住していたとわれ、『後漢書』には「槃瓠」とよばれる霊犬をその始祖にもつという起源伝説が記されている。ヤオは、おそらく宋代における少数民族に対する圧政や迫害のために、12-13 世紀頃から徐々に南あるいは東へと分散移動し[*1]、遅くとも 15 世紀頃にはベトナム北部にヤオの集団が居住していたと推測されている[*2]。その後も中国における政治的な混乱や旱魃などによる生活環境の悪化を逃れ、また生業である焼き畑耕作のための新たな耕地を求めて、ベトナム北部へのヤオ民族の流入は 20 世紀中頃まで続いていた。1999 年の政府統計ではベトナムにおけるザオの総人口は 62100 人である[*3]。

*1 竹村 1981:6。

*2 Purret 2002:26.

*3 http://www.vietnamembassy-usa.org/learn/Composition%20and%20Distribution.htm

ヤオはその分散移動の過程で多様なサブグループを形成してきたが、ベトナムには、タイやラオスに比べ、はるかに多様なヤオのサブグループが居住している。言語のうえでは、ベトナムのザオはミエン（Mien）方言、ムン（Mun）方言、メウン（Meun）方言を話すグループに大別される[*4]。しかし、おなじ方言グループにあっても、移動してきた時期や経路によって、また現在の居住地によって、さらに異なるサブグループを形成している。



このようなサブグループの違いは衣装文化にも反映している。ベトナム北部におけるザオの女性の衣装は一見近似していても、装飾の細部の違いなどから住んでいる集落までわかる場合が多い。本稿ではベトナムに住む多様なザオ民族のうち、ザオ・ティエン（Dao Tien）とよばれているサブグループの衣装について報告する。

ザオ・ティエンは、ミエン方言を話すヤオのサブグループのひとつで、ベトナムにおける総人口は 35000 ～ 50000 人程度と推定されている[*5]。 ザオ・ティエンという呼称は、衣装に穴のあいた中国銭または安南銭が付いていることから、キン語で「銭」を意味する語が付された他称である[*6]。自称はミエンである場合が多い。ザオ・ティエンは女性が蝋けつ染めの巻きスカートを着用している点が、他のザオとの外見上の顕著な違いである。ベトナムのザオ民族のなかでは、女性が巻きスカートを着用するのも、蝋けつ染めを行うのも、ザオ・ティエンだけである。

ザオ・ティエンはベトナム北東部のカオバン Cao Bang 省、バッカン Bac Kan 省、トゥェンクアン Tuyen

*4 Pourret 2000:11, 15-27.

*5 Pourret 2002:39

*6 それぞれのサブグループの名称は他称も自称も数多く、また時代にともなう変化もあり複雑である。ザオのサブグループに対する他称は、「赤ザオ」「細いズボンのザオ」「剃り上げ頭のザオ」など、主に女性の衣装の形や色などを指標としたものが多い。同じグループに対して、複数の呼称が用いられている例も珍しくない。現在、ベトナム北部のザオの諸集団は自分たちを Mien あるいは Man と称していることが多い。

Quang 省などに居住する東部グループ（以下東部ザオ・ティエンとする）と、ベトナム北部の中央を流れる紅河より西のホアビン Hoa Binh 省、フト Phu Tho 省、ソンラ Son La 省などに居住する西部グループ（以下西部ザオ・ティエンとする）の二つに分けられる(図 1)。両グループの女性の衣装は近似しているが、女性の頭巾が東部グループでは白、西部グループでは濃紺である点で見分けられる（図 2、図 3)。人びとの記憶の限りにおいては、二つのグループの間には交流はない。また、ザオ・ティエンと近似したグループは現在ではベトナム以外には見いだされない。

ザオ・ティエンは、ベトナムに住むザオ民族のなかでは、比較的古い時代に移住してきたサブグループであると推測できるが、いつ頃、中国のどの方面からベトナムにやってきたかは明らかではない。19 世紀末のフランス人による記録では、当時ホアビン省にすんでいた西部ザオ・ティエンは、明代に広西を発ち、16 世紀末にベトナムに住むようになったと伝えている[*7]。また、東部グループには、明代に中国からベトナム東北端のカオバン省に入ってきたと伝えるグループもある[*8]。

ザオ・ティエンの染織

ザオ・ティエンの衣装に用いられる主要な繊維素材は木綿である。バッカン省バベ県に住む東部ザオ・ティエンは、現在も綿花から糸を紡ぎ、高機で綿布を織っている（図 4)。高機の構造や整経方法は隣接して居住しているタイ Tay 民族のものと同様である。20 世紀には東部ザオ・ティエンの一部では、現在もモン Hmong（ミヤオ、苗）民族が使用している腰機と同様の織機を使用していたということであるが、現在はみられない。

他方、ホアビン省ダバック Da Bac 県の西部ザオ・ティエンの村々では、広幅の布の製織は 30 年以上前から行われないようになり、綿布はムオン Muon 民族やターイ Thai 民族などから買ってきた。ただし、経糸紋織りの細幅の帯は、筬のない腰機で現在も織っている（図 5)。また、衣装などに用いる細い組紐も手作業で作っている（図 6)。

染色は、リュウキュウアイやインドアイを用いた藍染めが現在も行われている。濃紺以外の色の染色は行っていない。

織りによる装飾技法としては、経糸紋織が帯にほどこされるだけである。装飾技法としては刺繍

*7 Pourret 2002:

*8 Pourret 2002:38-39

が主要であり、木綿糸や絹糸による精緻な模様がどの衣装要素にも表されている。さらに、蝋けつ染めが、ザオ・ティエンを特徴づける染織技術としてあげられる。

ザオ・ティエンの蝋けつ染め

東部ザオ・ティエンと西部ザオ・ティエンの蝋けつ染めの手順や道具は、ほぼ共通している。

①まず綿布の毛羽をおさえるために、布を平らな石の上にひろげ、イノシシの牙の側面で布の表面を強くこする。ホアビン省の西部ザオ・ティエンでは手でこするが、バッカン省バベ県の東部ザオ・ティエンは足でこの作業をする（図 7）。

②竹製の籠にバナナなどの葉を敷き、灰を入れて、五徳または土製の小さな竈をセットし、陶器の皿に蜜蝋を入れて溶かす。

③蝋置きは膝にのせた竹製の丸い盆の裏に布を広げて行う（図 8）。主要な蝋置き具は、竹を細く割ったヒゴを、竹の表皮を外に向けて三角に曲げ、蝋をつける部分を細く削った単純な道具である。この蝋置き具では一定の長さの線しか描くことができないので、図柄に応じて、*phong cao* とよばれる葉を短冊型にしたものでマスキングしながら蝋置きをする（図 9）。

④丸い図柄は、円の大きさに合う太さの竹筒で蝋置きをする。

⑤さらに細かい部分を描くために、西部グループでは、金属製の小さな T 字型の蝋置き具を用いる（図 10）。この金属の蝋置き具は先が 3 ～ 12mm ほどの異なるサイズのものが用意されている。このような金属の道具は東部グループにはなく、代わりに、竹べらの先を二本の短い線が描けるように削ったものを使用する（図 11）。この竹べらは、丸紋の内部を描くときのみに用いられる。

⑥蝋置きのあと、藍染めをし、熱湯で脱蝋する。

ザオ・ティエンの衣装で蝋けつ染めが行われるのは女性の巻きスカートのみである。

女性の衣装

ザオ・ティエンの女性の衣装は、蝋けつ染めの膝丈巻きスカート、胸エプロン、前あき長袖上衣、帯、脚絆、頭布で構成される（図②、③）。

女性の巻きスカートは、チューン *chuun* とよばれ、濃紺地に蝋けつ染めで白く模様を表した織巾約 30cm の綿布を六枚はぎあわせ、ウ

エスト部分にギャザーをとって、仕立てられている。ウエスト部分の端に付いている紐で固定する。

スカートの蝋けつ染めの模様は、東部グループも西部グループもジグザグと丸紋で構成され、作者や、着用者の身分、あるいは集落によるデザインの違いはほとんどなく、基本的に一種類であるといってよい（図 12）。東部グループと西部グループは、現在では遠く離れて居住し、少なくとも一世紀以上交流はない。しかし、布に蝋置きをする際に、約 30cm の織巾のなかに、五つの頂のある大きなジグザグは 2 段、丸紋は 18 個の列を 2 段描くという配置も、模様のサイズも同じである。細部の違いとしては、西部グループではジグザグの上下にある水平な八本の線の間に、金属の小さな蝋置き具で斜めの格子を描いた部分が挿入されているが、東部グループにはこれがないことなどがあげられる。

女性の蝋けつ染め巻きスカートは、通常は一枚着用するが、寒いときや外出時には 2 枚重ねて着用する。

上半身には上着の内側にまず、「金太郎腹巻き」に似た胸エプロンを着用する。これは、現在では東部グループの盛装にのみ残存している（図 13）。長方形の布の上に台形の布を縫いつけ、胸元に刺繍をほどこしたもので、首と背中で紐を結んで固定する。盛装時に銀の首輪を着用したときには、胸エプロンの上部を首輪に固定することもある[*9]。

女性の長袖上着は、前の中央が開き、衽はなく、左右の脇に腰までのスリットがある。前は左右の見頃を重ね合わせて、細い組紐か経糸紋織の帯を腰に巻いて閉じる（図 2，図 3）。

上着には、裾、袖口に線状の刺繍と別布の縁取りがついている。西部グループでは裾に白で斜めの井桁型モチーフそして、背中の中央に二つの菱形の卍の刺繍がある（図 14）。東部グループでは、背中の中央に菱型と犬のモチーフ（図 15）、脇のスリットの背中の上部と両肩にも卍紋や犬の刺繍がある。

上着の首の後には、ザオ・ティエンという呼称の由来となった、安南あるいは中国の古銭が布製のループで取り付けられている。その個数は東部グループでは 7 個、西部グループでは 6 個である（図 16）。ホアビン省の西部グループでは、これらの古銭は心臓、肺、肝臓、脾臓などを表すといい、上着の背中の二つの菱形の刺繍（図 14）は腎臓を表しているという。上着は市場に出かけるときや、寒いときには同じもの

*9 女性の胸エプロンは、20 世紀においてベトナム北部のザオ、モン、ターイ、タイ、ムオンなど多くの民族集団にみられた衣装要素である。現在は民族衣装として脇開きのアオザイが一般的になっているキン民族の女性も、20 世紀初頭まで一般的だった上着の中央が開く様式の衣装では、内側にイェム *yem* とよばれる胸エプロンを着用していた。かつては、暑い労働時などには、上衣を脱いで、胸エプロンとスカートだけで過ごす事もあった。

を二枚重ねて着用する。

脚絆は、白地に濃紺の糸で、鳥のモチーフや井桁型などを細かく刺繍した長方形の布である（図 17）。東部グループでは赤や黄色の糸による縁取り刺繍もほどこされている。

女性の頭布は、西部グループでは濃紺地に二重の卍模様や鳥などを刺繍があり、ビーズと赤い絹の房飾りが付いている（図 18）。東部グループの頭巾は白地に、濃紺と赤で幾何学的モチーフを正方形に配した図柄を両端に刺繍した布である（図 19）。

ザオ・ティエンの女性は、20 世紀の後半まで、蝋けつ染めに用いたあとの濃紺になった蝋を暖めて頭髪全体に塗り、髪を結っていた（図 20）。東部グループでは現在も希に髪に濃紺の蝋を塗った年配の女性がいる。蝋を塗った髪はそのまま頭頂で髷に固める場合もあったが、木製の円錐または四角い木型を髪に取り付け、その上に頭布をかけるスタイルが盛装であった（図 21、図 22）。この慣習のため、ザオ・ティエン民族は「頭を染めるヤオ」を意味する「マンサンドウ Man San Dau」とも呼ばれることもあった[*10]。

装身具として、東部グループの女性はビーズをいつも首に巻いていた。また盛装のときは銀の首輪、耳飾りのほか、上着の前あき部分を円形の銀板で飾り、さらに、キンマを入れる、銀板で装飾された巾着も背に掛ける（図 13、図 16）。西部グループでは耳飾り、細い銀の首輪のほか、腰帯に銀細工の装飾セット（図 23）を下げた。

男性の衣装

現在、ザオ・ティエンの男性は日常には民族衣装を着用していない。バッカン省での調査ではザオ・ティエンの男性の衣装はすでになく、洋装になる前はタイ民族の男性と同様の衣装を着用して

*10 ただし、ザオ・ティエンのほか、ハータイ Ha Tay 省に住むザオ・クアン・チェット Dao Quang Chet の集落でも女性はかつて髪に塗っていた。また、Pourret [2002：36] によると、１９世紀まではザオのほとんどのサブグループの女性がロウを髪に塗っていたという。

いたという。

ホアビン省のザオ・ティエンでは男性の衣装は、女性と同様の長袖上衣、経糸紋織の帯、藍染め無地のズボン、濃紺の頭巾で構成される。かつては男性も長髪で、首の後あたりで曲げに結っていたという。

儀礼の衣装

儀礼に際しては、女性も男性も日常と同様の上着を二枚、四枚、あるいは六枚重ねて着用する。女性はスカートも２枚以上重ねて着用する。

ホアビン省に住むザオ・ティエンには、男性の婚礼用上着がある。婚礼用上衣の背中の中央には赤と白で犬のモチーフを並べた刺繍があり、これは背骨を表す。背中の腰あたりには、腎臓を表す大きな星形の刺繍が左右にある。さらに、肩胛骨の高さに正方形の別布が５～６枚下がっている。これらのうち赤い布は心臓を、白地に紺で二重卍と鳥を刺繍した布は肺を、赤と白と黄で三角形を刺繍した布は肝臓を表すという。

また、西部ザオ・ティエンでは、男児の少年期におこなわれる命名儀礼において、儀礼を受ける男児は濃紺の膝丈巻きスカートをズボンに重ねて着用する（図 24）。男性用の巻きスカートも女性のものと同様にチューンと呼ばれているが、男性の巻きスカートには蝋けつ染めが行われることは決してなく、裾に二重卍などの刺繍がされているだけである。

同様の巻きスカートは、儀礼を執り行う司祭も着用する。司祭は女性と同様の脚絆も着用し、さらに、丈の長い上着や特別な帽子も着用する。ザオ・ティエン以外のヤオにおいても、司祭が巻きスカート状の衣装を着用する慣習があり、ベトナムでは、トゥェンクアン省からホアビン省にいたる地域などに居住するザオ・クアン・チェット Dao Quang Chet や、バックザン Bac Gian 省やクアンニン Quang Ninh 省に居住するザオ・タイン・ファン Dao Thanh Phan などにおいて、司祭が、ザオ・ティエンものと類似した、濃紺地で裾に刺繍のある巻きスカートや脚絆を着用する[*11]。

ホアビン省のザオ・ティエンでは男性の屍衣としても同様の巻きスカートを着用させるか、あるいは少なくとも棺のなかに入れる[*12]。

*11 Diep 1997:102,130.

*12 ラオカイ省サパ県の Hmong 民族の一部の氏族でも、男性の屍衣としてスカートを着用させる慣習があったと伝えられている。ただし、Hmong の場合、女性と同様の大麻製蝋けつ染めのスカートであるという。

ザオ・ティエンの移動の歴史と衣装

先に述べたように、ベトナムに居住するザオ民族のサブグループのなかで、蝋けつ染めスカートを着用するのは、本稿でとりあげたザオ・ティエンのみである。ザオ・ティエンの蝋けつ染めの技法や、蝋けつ染めスカートを着用する慣習は、どのような歴史的な系譜にあるのだろうか。

ベトナム北部および中国南部、ラオス・タイ北部に居住するモン Hmong（ミヤオ、苗）民族では、多くのサブグループが女性の膝丈巻きスカートや上着を蝋けつ染めによって装飾している。モン民族とヤオ民族はともにミャオ-ヤオ語族を形成しており、中国やベトナムでの居住地域も重なる部分が多い。ただし、中国や東南アジアのモン民族が蝋けつ染めに用いる主要な蝋置き具は二枚の金属片をカラスグチ状にセットした道具で（図 25）、ザオ・ティエンの竹ペンとは異なっている。

ベトナムでは、ザオ・ティエンとモンのほかに、中国との国境近いハザン Ha Gian 省クアンバー Quang Ba 県に居住するボイ Bo Y 民族のサブグループに、女性の民族衣装として木綿の蝋けつ染の長い巻きスカートがみられる（図 26）。しかしながら、このサブグループの人口は極めて少なく、蝋けつ染めの技術も道具も残っていない。現存するわずかな蝋けつ染めスカートも中国から購入したものだという。ベトナムのボイ民族は中国の布依族であり、150 年ほど前にベトナムに移住してきたと伝えられている。

中国では、苗族以外に貴州省南部や広西壮族自治区に居住している布依族の一部が蝋けつ染めを行い、女性は蝋けつ染めの長い巻きスカートを着用する。布依族が用いる主要な蝋置き具も金属製のカラスグチ状のものである。

また、広西壮族自治区に居住する「白褲瑶」や「紅瑤」とよばれているヤオのサブグループでも女性が蝋けつ染め膝丈巻きスカートを着用するが[*13]、蝋けつ技法についての詳細な資料はない。

蝋けつ染めの巻きスカートを着用する民族集団の分布状況や、それらの民族の移動の歴史を考えると、ザオ・ティエンの蝋けつ染め巻きスカートはヤオ、モン、布依などのものと同じ系譜にあると考えてよい。ザオ・ティエンの祖先が中国南部で、蝋けつ染めをする布依族などと隣接して居住していた可能性は高く、ベトナムへの移住よりも古い時代に蝋けつ染めのスカート着用の慣習がすでにあったと考えられる。蝋けつ染めの道具はザオ・ティエンが独自に考案したもと推測できる。

ザオ・ティエンの衣装と移住

ザオ・ティエンの人びとに、ベトナムに移住してくる前は、中国のどこに住んでいたのかと尋ねると、中国から海を渡って移住してきたという話が語られる。この移住に関する話は、ザオの他のサブグループのあいだでも聞かれ、途中で船が転覆するエピソードや、旅の途中でイヌやトリに助

*13 張 1993：fig.302、fig.301。

けられるといった点も共通している。ザオ・ティエンの衣装もこの「移住の旅」に関連づけられている。

女性のスカートについて、フト県からホアビン省に嫁いできた女性は、現在は膝丈である巻きスカートは、中国に住んでいた頃はもっと長かったが、ベトナムに移住してきたのち、気候がより暑かったので、短くしたという。そして、スカートの蝋けつ染めの模様は、もとは水平線だけの単純なものだったが、中国からの移動の途中で、超えてきた山々を表すジグザグ模様やそれらの山々に咲いていた花をあらわす丸紋が創られたという。

また、この女性はザオ・ティエンが中国からの移住の旅を子孫に語り継ぐために作ったという上着を母親から譲り受けて所持している。その上衣は藍染めの木綿製で、背中にはザオ・ティエンが中国からベトナムへ移住するときに苦難を助けたとされるイヌのモチーフが全面に刺繍され、さらに、菱形に配された二つの大きなモチーフが、白い綿糸と黄色い絹糸で表されている（図 27）。この藍染めの上着は、「海を渡るための上着」を意味する「クェ・コィ・ルィ」とよばれ、中国を出発する数ヶ月前から糸を染めるなどして準備し、移住の旅の間に刺繍をしたのだと伝えられている。同様の上着が、彼女の出身村ではいくつかの家庭に保存されているというが、残念ながらその地域へは、外国人の立入りは制限されており、詳細については未調査である。この上着は女性用であると言われているが、彼女の知る限りではこの上着が着用されることはなく、大切に保存されてきたという。

この祖先伝来の上着には背中と前身頃にあわせて 20 個の古銭が付いている（図 28）。ザオ・ティエンの通常の上着に付いている古銭は、18 ～ 19 世紀に鋳造されたと推測されているものであるが[*14]、「海を渡るための上着」に付いている古銭は 11 ～ 14 世紀に鋳造された可能性を示している[*15]。一部のザオ・ティエンは、明代にベトナムへ移住してきたと言い伝えているが、この古銭が示している年代はそれよりも古い。上着の古銭以外の部分は、実用に供されることはなかったとしても、一見数百年を経たようには見えない。作り直されることがあったかもしれないが、オリジナルを正確に複製し、古銭も移しかえてきたのであろう。

---

*14　通常の上着に付いている古銭は、乾隆通寶（1736 年　清）、道光通寶(1821 年　貴州)、明命通寶（1820 年　安南）、嘉隆通寶（1802 年　安南）など。http://www.ac.wakwak.com/~sodo/data/annan.htm 、http://www.bf.wakwak.com/~kosenkan/ 参照

*15　元豊通寶(1251 年　安南)、皇宋通寶（1039 北宋）、政和通寶（1111 ～ 1117 年　北宋）、　開泰元寶（1324 年　安南）と推定されるが、真贋は定かでない。　http://park12.wakwak.com/~kosenkan/　参照。

ところで、ザオ・ティエンの人々が語るのと同様の「渡海神話」が中国南部から東南アジアの北部へ移動したのヤオ族にひろく伝承されていることが、竹村卓二によって指摘されている[*16]。竹村は、「渡海神話」はヤオ族が過去に体験した漢民族による迫害という「＜民族的受難＞の強烈な記憶による終末論的な世界観の表象」であり、ヤオ族が実際に海を渡ったかどうかはにかかわらず、「ヤオ族の＜彼岸＞への渇望が、たまたま<渡海>という神話の演出効果を高める場面設定を創出したものに他ならない」と結論づけている。さらに、「固有のテリトリーを領有することなく、また村落を越えた政治的単位を組織せず、東南アジア北部の山岳地帯に涯しない移住の途に就いた」ヤオ族の民族的アイデンティティが「渡海神話」によって鼓吹されてきたと、述べている[*17]。

ザオ・ティエンの女性の巻きスカートの模様や「海を渡るための上着」についても、現在の人々が中国からベトナムへの「最後の旅」と関連させて語るとしても、実際には、宋代に始まり、その後何度も繰り返された移住の歴史を伝えるものだと考えられる。かれらの「移住の旅」について言葉で語り継ぐだけでなく、衣装の模様として視覚化し伝承していくことは、多様な民族集団が交錯して居住する地域環境のなかを移動しながらも、自民族を存続させるために意味のある行為である。

また、ザオ・ティエンの衣装においては、女性のスカートの蝋けつ染めにみられるような、画一性や不変性こそが衣装の第一義的な機能を担ってきたといえる。これはザオ・ティエンのみならず、ザオの他の集団をはじめベトナム北部の少数民族集団の多くについても言えることである。これらの人々の衣装は数世紀ものあいだ変化しなかったというわけではない。しかし、民族集団の表象となる要素を継承し、自分たちはヤオ民族であり、その特定のサブ・グループに属するというメッセージを衣装によって、他の民族に対してだけでなく、自分たち自身に対しても常時明示することで、民族集団の結束と誇りを保ってきたのである。

参照文献

張　暁凌　編
1993　『中国民族美術全集　5　穿戴篇　服飾巻　上』台北：華一書局。
Diep Trung Binh
1997　*Patterns on Textiles of the Ethnic Groups in Northeast of Vietnam.*　Hanoi: Cultures of Nationalities Publishing House.
Pourret, Jess G.
2002　*The Yao：the Mien and Mun Yao in China, Vietnam, Laos and Thailand.* Chicago: Art Media Resources.
田畑久夫、金丸良子
1995　『雲貴高原のヤオ族』東京：ゆまに書房。
竹村卓二
1981　『ヤオ族の歴史と文化』東京：弘文堂。

*16　竹村　1981：267-288。

*17　竹村　1981:290、299。